

カジノ巡り

勝ち・負け交叉の人生

人生とは、遺伝子に支配される肉体の成長(ま一、良くも悪くも本能か)のエネルギーで心が育まれていく(時には苛まれていく)個人的な図式と言える。その道には、ヒトとしての高みに上る喜びもある一方、至る所に転落へと続く悪癖(甘い罠)も多い。

成功した人生か、あまりうまくはいかなかった人生かあるいは悔い多いものだったかは、後になって、つまり、65歳ころに一応の結論が出る。しかし、その後の時間も油断できない。

人間関係でサヨナラ負けの終わり方をする人びとも多い。

「棺が閉じられた時に最終結論が出る」とされている。

成功と転落の違いはなにか。

それは、個人の人生を自分のために利用しようとする第三者がいるためであろう。

人間の心の動きを利用しようとする者に対して、反撥し逆に勝とうとする自分の心の動きとの戦いが人生なのかもしれない。

遙か昔、韓非子は春秋・戦国以前の歴史と、それに続く始皇帝による統一前夜の末期的な苛酷な状況から《人間の歴史は利益追求を軸として変化する。人間とは一人一人自分の利益を追求する存在である。恩愛によって結ばれているなどと考えるのは、甘い考えである。親子の仲でさえ、男の子は欲しいが女の子はいやだなどと考えるのは、利害の心が働いているからで、まして君主(カジノ側)と民衆(客)との間ではなおさらのことだ。君主のために忠節をつくすのは、もちろん恩賞が目当てだ。要するに、一般の人情としては「安利」を求めて「危害」から離れようとする。したがって威勢には屈服するが、愛情をかけてやるとすぐにつけあがる。一方の利益は他方の害で、君主と臣民との利害

は、とりわけてきびしく対立する》とした。そして《人が少なくて物質の豊かであった古代では、人の欲望はまだ小さくて道徳がものを言った。しかし、人が増えて物が足らなくなった中世では、人々は頭を使って争うことになる。》

《利益を追求する欲望がますます増大し、力で争う時代が到来した。利害に走るのが人々の心であるからには、恩賞で釣って刑罰でおどすのが人々を支配する第一の方策だ》との真理を見出した。

恩賞と刑罰、これこそ賭け事の本質である。

もちろん、利害を超越した高潔な人格のあることを知っていた。しかし、それは少数者である。そして、恩賞に目もくれないような存在は、大衆支配の原則からして、むしろ国家にとっては有害だと考えた。

わが人生を振り返れば、反省・後悔が満足と激しく交叉したものだ。

【人間万事さまざまの馬鹿をする】

拙文の目的は、「出来るだけ人間性の観察」を積み、私が生きたあかしとして書き残すことである。

レンタカーによる走り回りにしても、その行動の中で、身を危険に曝す想定は可能だ。

もし、そんなことがあって、書き残すまで至らなくても、それはそれでよい。熱くなって、行動することと書き残すことは別ものだから。

大げさに言えば、それが人生だろう。

中でも、人類は賭け事を無視することはできない。

自分の中の勝負好きな性質に気づかせたのは、囲碁と麻雀であった。

麻雀と囲碁

この30年間で強くなったものに、囲碁とマージャンがある。

「囲碁が強く……」の部分には、ゲラゲラと笑い出す友人の顔が浮かぶ。しかし、後者については周りも肯首せざるを得ないであろう。

「不良がするものと決めてかかっていたこのゲーム」を覚え始めたのは、医者になって3

年目のころであった。

永久に脱すことができないと考えていた医学部の6年間であったが、最後の1年間は次々から事件が起った。夏に心臓移植騒動があったし、卒業試験や国家試験もあった。

気づいたら、いつの間にか、私は渡辺淳一氏の10年後輩として卒業していた。

2年間だけ親元に帰ってみたいと上京し、東京逋信病院に勤務した。

このあわただしい別れが札幌との決別となるとは考えもしなかった。

今、思えばこの上京が人生の最初の賭けだったのかもしれない。東大の関連病院に田舎者が飛び込んだのだから。

北海道から持って来た荷物にも、医学知識と言えりほどのものは無く、その分野の関係書類と言えり「にわか勉強で取得した医師免許」だけだった。結婚が大きな賭け、だったと言うものもいるかのものもいるが…

マーじゃん

私が28歳で勤務し始めた三井記念病院は1年前のオンボロ病院から先端病院に生まれ変わったばかりで、病棟も完全にオープンされていなかった。内科には、若い医者が15人位いたが、ほとんどが独身で家に帰る者は少なく、毎晩麻雀卓が立っていた。

深夜でも2卓で闘いが起っていた。それを数人が取り囲んでいた。つまり、10数人の青年が零時に病院にいたのである。

現在は受け持ち患者が重篤になって自主当直しても、一銭も出ないと聞くが、その頃は夜残業手当がある程度出た。

受け持ちの患者は必ず危篤状態であった。まあ、受け持ち医に多少の責任無しとは言えり切れりないかも知れりないが… そういえりば、死亡検案書の「死亡原因」の欄に自分の名前を書いた者がいたそうであるが、慌てて消す姿が目につかぶ。

とにかく、その手当の争奪戦でもあった。無人の内科外来とはいえり、パイをかき回し、大

声や嬌声を発するのであるから、評判にならない訳が無い。

部長、科長たちが深夜、ちらちらと顔を見せりるようになった。苦々しく感じて居る事は明白であった。しかし、その頃は、三井記念の若い医者は武者修業の気持ちが強く、働き場所に困る事も無く、また、「病院は俺たちが支えりているのだ」と自負していた。

今では考えりられないが、色々な事件で…部長と喧嘩騒ぎになることもあったくらいである。だから同期とも言えりる若者が結束していた2年間は、院長が見にきて、わざとらしい咳をしてりも、意に介す者はいなかった。

なにせ、医局の後輩である若者たちは、すべての部長先生の過去から現在に至るまでの私生活を知っているという強みがあった。

例えりば、愛と別れ・喜劇と悲劇・その後の彼女の行方・医療におけるドジなど本人すら知らりない事まで、皆知っているのである。

だから、自分の若い頃の弱点を知っている部下には、暖かい容認の態度を取らざるを得りないのだ。それだけでなく、目の前の若造が後になり、どんな要職に就くか解りらないのである。

ある分野・地域で医師として生計を立てて行こうとする時、後でどんな仕返しをされるか分からないから、怒鳴る訳には行かないのである。

年齢層が分かれて、同期という結束が薄れて来た。特に外科では、昼間寝てりいて、夜になると、何処からともなく現れる者がいるとか言われり始め、終に、外来での麻雀禁止令が出て、長い伝統を持つ麻雀の音が消えた。名言がある。「老人たちは、悪い手本を示す事ができりなくなった腹いせに、良い教訓を垂れる」と。

同じ年頃の仲間たちとの軽口のやり取りと覚えたてのゲームのコンビネーションは実に楽しかった。昼間の苛酷な肉体労働の後の語らいは無上の幸せであった。江戸時代の遊郭の女性たちがしていた生活と同じである。

ヒモやツバメが大切にされる訳である。急に停電になった時などは、ハチマキをしてそ

れに懐中電灯を挟んで続けた。病棟からの sos には、4人が揃って行った。

驚くことに、この子供たちの饗宴をアリバイ工作に利用していた大人がいた。

深夜一時頃に、なぜかひと眼でも疲労困憊とわかる姿で我々の前に現わす仲間もいた。

そして、そこから家庭に電話をする。電話機をこちらに向けて、ジャラジャラという音をわざわざ入れて「イヤー、参ったよ！今日も付き合わされて！もうちょっとしたら終わるから、カギ掛けないで…」と。

我々は彼の挙動はおかしいと、断定した。絶対変だ！彼は麻雀してないんだもん。電話機に麻雀の音を入れるためだけにやって来たのだ…「お疲れさん」と言うと彼はニターツ。

しかし、この病院はほとんど若い医者が数年のサイクルで大学へ帰って行くシステムだったので、段々と年齢層が分かれて行った。

加えて、管理職たちの地道な圧力や、それぞれの結婚などもあって、外科に続いて内科の夜祭りも消えて行った。考えてみると、多くの若い医者が深夜まで残っていてくれる病院くらい患者にとって幸せな事は無いはずである。

今はほとんどの病院の若い医師は5時になれば、帰宅か否かは別にして病院を離れる。

こうしたゲーム特に麻雀で現れる個人の性格は、驚くほど(終生変わらない)本質に迫っていた。

36年過ぎた今でも、その時に得た印象は正確であったと確信できる。青春時代に麻雀を楽しくできた仲間とは、麻雀さえしなければ、生涯仲が旨く行きそうである。

その後、若くして開業した私は町の一人打ち麻雀店で修行することとなった。

(白以外のモウパイはまったくできず、符も数えることができない)三十男にとって町の麻雀店での現実は厳しかった。

しかし、私には、目標の人が二人もいた。「彼らに勝ちたい」この強い願望が私を支え、小遣いを減らした。

苦節七年、ついに、彼らをして「コンチャン、この頃強くなったね！」と言わしめた。この言葉を待っていたのである。

もっとも、この言葉でメロメロになって、その晩は記録的な敗北を喫した。

その後、「人生の節目の電話連絡は麻雀屋で受けた」のではないかと、思うほどである。子供も「麻〇」というが、これは偶然。そもそも、命名に父親が介入できる時代ではない。

麻雀は、多少であれ金を掛けている割には「不完全なルールと不公平な進行」のゲームである。必ず、サキヅモをする、ひっくり返すは日常茶飯だし、ライバルがチーと言うって鳴こうとすれば、わざとポンと言って邪魔をする等の不正義が罷り通る。

その頃はまだ全自動ではなく、4人が、稗を覚えながらかき回していたので、プロなどは、7割かたは覚えていたであろう。引き換え、正義感からか覚える事を拒否し、4分の1を崩さないで積むことに全精力を掛けていた。しかし、頻繁にひっくり返してしまう。「失礼」なんて言っている間、後の3人はジーと表を向いた牌がどこに行くかを覚える。つまり、敵は私の牌の幾つかを知っているのである。

この差は甚大で、勝てる訳がなかった。

「失礼！」なんていう必要はなかったのだ。腕が上るにつれて、敵が私の牌を知っていることを利用することができるようにも成って来た。

つまり、このゲームは心理戦の様相が強いのである。

敵は自分より持ち点が高い人だけである。彼だけを攻撃すれば良いのである。優勢になれば、逃げる。懐が暖かい者が強気で来ると、ラスになる事ができない貧乏人は降りてしまう。

しかし、ゆがんだ性格の人と麻雀するほど空しい時間もない。職場仲間でも共通の趣味として、いる場においても「単騎は北」とか「引っ掛けばっかり」とかに拘わり続けるのは歪んだ性格と言わないでいられない。

そうした方標的には裏のもう一つ裏の方法で「勝っても良い人」である。しかし、職場麻雀では「勝ってはならない上役」も存在するために、犠牲者は特定され、一種の食物連鎖が見られる。

不愉快な振込みが続けば、面白いわけが無く、血は昇り復讐をだけに神経が行く。「あいつをトップにだけはさせないぞ」と。

しかし、4人でしているために、ある者だけを狙っていると、他の者に次々と漁夫の利を得られる。

3位4位が続けば、逆上で帰る時間も忘れてしまい。ハッと気付けば午前2時。

灯光が外に漏れて警察に踏み込まれないようにカーテンが下される。外に出ても、雨など降っていれば、タクシーもなく、びしょ濡れヨレヨレの帰宅となる。

名誉とプライドと金銭の喪失で一時間は後悔の中にいる。

それでも、「麻雀で飯を食っている」と豪語し始めた。(もっとも、本当は「麻雀屋で、注文した飯を食っている」に過ぎないのであるから、早口で言う)だから、私自身もよそ様からみれば、どんな風に映っているであろうか。

やっと麻雀店での勝ち方が分かり始めたころ足が遠のいていき始めた。煙草である。終に麻雀屋から足を洗おうと決心した。理由は2つあった。

まず、強くなりたいたいという初期の目的を達したことである。これは放言してしまえば良い事項であり、特に検証の必要はない。

次は、対戦相手の劣悪さに我慢ができなくなった事である。そうした麻雀屋にフリーで来るには、それなりの理由がある。1割は職業に問題がある。2割の人々は私のような善良な市民であるが相手がいらないだけである。6割の人々は性格にかなり問題がある。性格が悪く会社仲間から弾き出された人々である。こうした人間と打つ時は、「何でこの人とゲームしなければ、ならないのか？」とそこに存在する自分に腹が

立つ。意地になって、彼を潰そうとすると、却って敗北する事が多い。そうした心の歪みは自分自身をも蝕んで行くのである。目付きの悪化、眉間のシワの深まり、意地悪さの芽生えなどは、私が人生で断固拒絶して来たものである。童顔と笑顔そして無垢の心が私の売り物なのだから。

しかし、最大の理由はタバコである。煙草を愛しないものは循環器専門医にあらず、と言う時代に育ったので当然喫煙していた。

新婚当時、麻雀して深夜に及ぶと、必ずと言って良い程、期外収縮が出現した。「寝室性の不整脈」と言っていた。不快な症状を自覚していたが、II a群などの使用は見送った。

つくづく思うが、患者にはバンバン出すくせに、自分は飲まない医者が多すぎる!

禁煙したことと、脱水にならぬように注意し始めてからは不整脈が皆無に近くなったが、麻雀屋の煙草森林の中にいることが、循環器系統に最悪な環境である事が分かった。

麻雀をきっぱりと止めて、今日で既に、17日間が経つ。もっとも、その中の5日間は香港に行っていたが。

禁麻雀は禁煙に大変似ている事に気づいた。もっとも、言葉に出せないものすべてに似ているのだから…

禁煙の時もこの頃からがきつかった。「麻雀を止めたのだぞ」と精神をからかってやると、頭は徐々に熱くなって行き、指先は微かに震え、じんと痺れた感覚が起って来る。この禁断症状は禁煙の時に、既に経験済みであった。

次に来るのは精神が持ち出す提案である。「タバコの無い麻雀屋だけでしよう。零時前に止めよう。変な人とは打たない」というものである。

累積赤字は解消されないままとなった。

囲碁

日本棋院の2段免許は阪神大震災絡みで、貰ったのであるから本物とはいえない。

父の相手をするために覚えたようなものであるから、かなり弱い。プロだって、一度昇段すれば落ちない。そのため、9段だらけになっている。日本棋院が九段にあるのもそのためとさえ言われている。

学生時代は授業中後ろの方で打っていた。先刻、教授はご存知で、石を落としてしまって階段教室にコトンコトンと落下音が鳴り響いた時「この間、東京で学生が授業中、碁を打っているんです。と言ったら、女子医大の先生が『うちでは編物をしています。編物の手を休まないまま、こちらを見ているんですから、情けなく成ってしまいます…』』と言うんだ。

(我々の方をじろりと見て)君たちも碁は良いから、化粧とか編物だけは止めてくれ」とすかさず言った。

仲間内の麻雀で勝ちつづけると、インチキをしているのではないかと陰口を叩かれるように、負けると金に困るだけである。

引き換え、囲碁は名誉とまではいかないが面子が懸かっている。将棋が弱いと言って知能が低いと云う人はないであろうが(と言うのも碁人が言うだけだが)、碁は「先が読めない、つまり考える能力に劣る」と云われそうな雰囲気がある。だから高段者は扇子なんかを持って「さあ、考えて、考えて」などと良く云う。

小馬鹿扱いされるために、悔しさが残ったりして、眠れなくなったりする。初段の成り立ては天井に白石黒石が出てくる。動くとアル中であるが。局後に得意そうに説明されると、二度敗北感を味わう。

見損じて、良かった碁に負けて「残念」と呟くと、高段者は「毎度毎度の残念か」などと私にはきちんと聞こえる小さい声で言う。

【腹の立つ時はわらいに念を入れ 負けたやつそっちへけぶをふけという 碁会所で見てばかりいるつよいやつ】

「高段者には性格的弱点がある」と思うのは低段者のひがみであろうか？高段者から見れば、初・2段の知識など無いに等しい。

しかし、それを得るために、人生で一番大切な頃のお時間を使い果たしたのであるから、当然であろう。

指導碁において、プロは、アマが間違えなければ、勝てなかったのに、対局中はおくびにも出さない。局後、勝った者は何故か頭に手をやり、小指で小さく搔く。8割の人々は、口を小さく尖らせて、気づかれる程度に唇で笑う。すこし、斜め前に落した視線をゆっくり敗者に戻して「いやいや、お強い。私は3回も投げようと思いましたが。ここを貴方が伸びていたら、これが死にますね、次に、本当は、ここは攻め合い負けでした。そして…」

いやいや、局後だからこそ、言うのである。投了するわけない。また、数十年もしているで、弱い者を慌てさせ、間違わせる事を知っている。素晴らしい着手に負けを覚悟したことなど顔に出さず「勘違い、炬燵で母の手を握り」なんて言う。また、「ツケにははねヨか」とか、「コウになるのかな？」とか「シチョウかな？」なんて言われりゃ、下手が混乱しない訳が無い。でまかせでも、である。

「下手泣かせ」には無数の定石がある。タイトルに無関係のすべてのプロはそれが「飯の種」である。下手が間違える形は研究され尽くしているので、そちらに誘導すれば良い。4つ置いても5つ置いても、結局は同じ事である。

特に星に置石が4つ有っても上手はちっとも恐くないのである。その形で打ち始めることを恐れているのは生活が成り立たない。下でとすれば、1回2手連続して打つことが出来たり、マッタ待ったが2回できたりするほうが良い。

しかし、その能力が、人生行路さえも狂わせてしまう事もままあるのである。

例えば、上司から「大切なお得意様だから、結果的に君がちょっとだけ負ける碁にしてくれ」と、くだく念を押されていた高段者がいた。

終盤に差し掛かり、どのように負けようかと思案をしていた。タイコ持ちでもないのに、昼

間から持っている扇子で、頭を叩いて、ぼやいてみたりしていた。

突如、頸動脈のセンサーが誤作動し、本能領域に血が溜まり、獰猛な攻撃性に支配され、両者で決着がついていたはずの隅に白石を置いてしまった。それは「目の中に指を入れてかき回す」といわれる金が掛っているときでしかない暴挙である。

「勝った」と顔をあげた途端、「こんな不愉快な碁は初めてだ」と盤をひっくりかえされて、高段者はやっと我に返ったようだ。

彼らにすれば、「一生をつぎ込んだ知識」で見事に勝ったのに、「勝負には拘りません。強い人が勝つのは当たり前」とのうのうと言う（腹の中の煮え立ちは別にして）

初段くらい腹立つものもないであろう。それにしても、駅前の碁会所はどうしてピンク映画館の上にあるのだろうか？同じ経営者に違いない。両者に共通する何かがあるのだ。白昼碁会所に行く私の背中に「あんな顔して昼間から、いやらしい」という視線が突き刺さる。そして、顔面を紅潮させてエレベーターから降りる私を「あんなに赤く興奮していやらしい」と二回目の軽蔑をされる。患者さんだったら、しどろもどろの弁解になりそうである。

碁が多少の名誉を掛けるために、碁会所から出て来る中年男は赤い顔をしているが、麻雀の場合は、負けて痛むのはサイフに過ぎないので麻雀屋から負けて出て来るときは青い顔をしている。

それにしても、麻雀屋パチンコ屋から出てくる時に時計を見るのは負けた人であるのは何故か？



カジノ

わたしはギャンブラーというレベルではない。囲碁でいえば、3-4級といったところである。

人類のごく一部の人は賭け事から足を洗うことができない。

昔、王無夢という男は賭け事が好きで、稼いだ金は残らず丁半につぎ込んでいた。妻の王元美は理解できず、「どこがそんなに面白いのか」と聞くと彼は「その時の顔の真剣さが実に素敵だ」と答えた。

囲碁と同じで、その雰囲気が好きで、いろいろな国のカジノを訪れるようになった。

というのは、都市のカジノは上流の客がいなければ成り立たず、ランク上のリゾート地でなければならない。つまり、カジノがあるリゾートはその国でも安全な観光地と判断できるのだ。

こうして、ヨーロッパドライブとカジノが結びついた。わたしのカジノ研究も最後のまとめの段階に入って来た。この人間性の研究という主題は異国を旅して、カジノでそこに集まる人間を観察することで大きな成果を与えてくれる。

タキツスは「いったい、人間事象は、運命とか不変の必然性に従って展開するのか、それとも、全くの偶然に従うのか、といつも悩む」と述べていたが、様々偶然と勘違いが交叉する空間であるカジノには「不変の必然性」だけは存在しない。カードや機械と客の遺伝子の間にディーラーという人間が仲立ちをして、客の判断

を金銭で評価している。そこには喜怒哀楽が発生し、「生き様」が凝縮している世界でもある。

ホテルのロビーとその街の悪所で得られる考察と同じ人間性が展開されるのがカジノである。ただし、悪名が安定しているいかがわしい場に行き、考察をし、無事帰還するには金だけではなく、度胸と語学力が必要である。

私にとれば、前二つは何かであるが、言葉の壁がある。しかも、これは帰還時に秘かに持たされる病原菌に対する恐れに直結する。ガイドブックの簡単な会話例の「病気は大丈夫でしょうね」を読み上げることで解決しない。「はじめに言わなくてごめん。治療が必要なものは2つだけよ。この仕事も治療費のためなの」とは言わないであろうし、現地語でべらべらと回答されても「イエス、ノウ」だけさえも聞こえない。灯一つない闇の中を駆け回るに似ている。

そもそも、住んでいるところでもしないのを飛行機に乗ってまで行動しに行くことはない。

旅は多くの人間観察をさせた。クロマニオン人一種であり、その思考・行動は同一であることを理解した。

異国で出会うヒトたちたちとの共通性を考えると「考えることは一緒」は人類に真実である。つまり、ネアンデルタール人以来の無意識の世界を脳に皆が普遍に持っていることの証明か。

二度と会わないことなど微塵も思わせない奇妙な連帯感がある半面、民族性違和感や悪の性格善の性格の人々との違和感が存在する。

無数に起きている犯罪は「自分のためならば自分以外を殺すことなど当たり前」という無意識の世界の存在する証であろう。

カジノに出入りするには言葉が重要となる。言葉ができないと、勘違いしたときに、修正がきかない。そんなに多くの経験もないが、プラハのカジノでは追い込まれた。

プラハ

プラハでこの凝縮を体験した。

ヴァーツラフ広場はプラハの繁華街であるが、昔

は「馬市場」であった。1968年自由を求めるドゥプチェックが第一書記長に就任し言論の自由をはじめとする運動へと発展していった。これが「プラハの春」といわれるチェコの動きである。7ヶ月後自国への波及を怖れた旧ソ連・ワルシャワ条約機構諸国は、軍事介入しソ連はこのヴァーツラフ広場に戦車を乗り入れ占拠し、「プラハの春」は終わってしまった。《その20年後の1989年、100万人にのぼるプラハ市民がこの広場に集まり、無血革命を果たした。》

この通りにはピンからキリまでのカジノがある。前の晩、近くのカジノに入って行ったが、客らしい姿もまばらで、スタッフも眼つきが鋭く、口角からヨダレが糸を引いていた。

慌てた風に逃げ出すと絡まれそうに感じたので、現金を出して(できればチップに替えて)手の中で音を立てて、いかにも賭けるぞという姿勢でゆっくりと一回りする。

奥から、出口へ向かうときは、今度は負けてしまった、という感じで首を振りながら歩いた。

翌日、今度は大きなホテルに隣接するカジノに入って行った。昼前でさすがに私が唯一の客だった。私が近づいていくと、スタッフはテーブルの覆いを取りはじめた。

絶妙なタイミングだったので「いいですよ。今日の最初の客となりましょう」と中央に坐り「ブラックジャック」を始めた。

しかし、すぐに、これは「ブラックジャック」ではないと判明した。

それはポーカーだった。私は、人を騙すことを親から禁止されていたので、「騙し合い」をするポーカーを知らない。

まずルールをまったく知らないだけでなく、言葉の分らない一見の外国人と、チョウチョウハッシなどできるわけがない。

そんなわけで、2回ほど促されるままに賭け金を上乘せしたあと、手でストップと言った。客は私だけだったので、皆が集まって来た。

「私はこのテーブルはブラックジャックと考えて、坐った。私はポーカーを全くは知らない。

目の前に出した掛け金は諦めるから、辞めたい」と申し出た。なにせ、ルールを知らないの
で、どうすれば、降りることができるかも知ら
ないのである。

東欧系のディーラーたちは「冗談でしょう」
と取り合わない。両手を広げたり、腕を組んだ
りして頑張る。

「そのかわり、隣のテーブルで「ブラックジャ
ック」をするから」と申し出て、少なくない現
金をポケットから取り出す。

キラッと眼が輝いた。誰かが主任を連れて来る。
何語かで「カモ、カモ…ですよ」と密談する。
暫くして、もったいぶった感じで「分かった。
では「ブラックジャック」をしましょう」と言
った。

それから、10回ほど少し多めの金額を賭けた。
7回目くらいから、偶然が私に利して、3回連
続で勝つ。私は、さりげなく、時計をみて「も
うこんな時間か」と呟いて「ごめん、約束があ
るから」と終わる。驚いたのはディーラーであ
る。これから、と言う時に止めるというのだ。
しかし、こうした怒りには、解決方がある。多
めのチップである。

サンキューという言葉に送られて大通りに
出た時は、暫く笑いが止まらなかった。

下手をすれば、奥の暗い所に連れ込まれ、処理
される危険もあったかもしれない。

クアラ Lumpur

プラハでは生命の危機感はなかったが、クアラ
Lumpurでは命がけのカジノであった。

ここのカジノがあるゲンティン・ハイランド
はクアラ・Lumpurから約50kmの所にあり、
標高2000mの高原にある。マレーシア唯一の公
認カジノのため、シンガポールタイからも訪問
者も多い。そこは深い密林の奥にあった。ハリ
マオーが住むとされる山をいくつも越えてタ
クシーで行かなければならない。自分の車のラ
イト照らすところだけが見える、というのも恐
怖を与える。登り道であれば、少しの樹林と空
が浮かび上がる。このカジノにはホテルのリム

ジン・ハイヤを頼み、フロントに記録させなけ
ればならない。

そして、カジノで待たせておいてそれで帰らな
ければならない。

もし、運よく勝ったり引き分けたりできても、
落ち込んだ顔をしなければならぬ。懐に大金
を抱いていると(金に困っている)運転手に知ら
れたら、漆黒の闇の中に車を止められて、良く
て放置、普通は坂に蹴落とされるであろう。

バックミラーでチラチラと私を盗み見する彼
を見ているとそうした予感が確信に近くなる。
もっとも、その気であれば、行きに実行するの
が正解かもしれない。

行きは確実に金を持っているから。

ウィーン

冬が迫ってきたウィーンのスティアン寺
院前の石畳道路は何重もの人垣に包まれた芸
人がいた。瘦身の若者の芸は彼の故郷で代表的
な演劇であるマリオネット。

20cm くらいの3体の人形を操る。

それぞれ満座の喝采を浴びていたが、中でも
我々をひとつの愉快的心にしてしまったのは
ビートルズ風のドラマーであった。安物のカセ
ットデッキの音楽に合わせの演奏では、途中の
観客の行動動作にも顔を反応させる。眼は飛び
出す、肩は竦ませる。終わっても物に過ぎない
はずの残りの人形とのやり取りなどがある。

その場を離れても余韻がいつまでも残ってい
た。

しかし、多くの大道芸人の中には物乞いに近
くなり、「いつかはリッパになるから」と当て
の無い一方的な押し付けも多い。

そのケルントナー通りの中ほどにカジノがあ
る。

オーストリアにはカジノが12所あるが、私の
ヨーロッパでカジノデビューはこのウィーン
である。このカジノが私を育てたともいえる。
カジノは紳士のためにあると教え、ウィーンの
ドイツ人の中で度胸がついた。

スイスに接するイタリアの飛び地カンピオー



ネでもさらにどうふるまえば独りでもその場を楽しめることを学んだ。この二カ所では、少なくとも外から見える部分は紳士・淑女でなければならない。

受付には胸を反らせた屈強な大男の用心棒たちが入場させなかった。ために、カジノのためのスーツとネクタイそして皮靴を持って行った。

しかし、世紀末がどの都市よりも似合うこのウィーンも、今までの世紀末のように悪徳を肥やしにして進展するという訳には行かないように映る。世界に吹き荒れる不景気風の中、非常識な賭け金で、我々小規模ギャンブラーを威圧したアラブ人も今はいなくなり、大金を握った中国人がラフな外見のまま押し寄せ、店は断ることが出来なくなったのだ。

以前は、紳士風でなければ、入れなかったのに、今回、私のスニーカー靴(彼らの分類ではサンダル)も通過させた。店の不景気は「日本人」に甘くなった。涎を垂しながら、「ネクスト・フォーマル」と背中を押した。強い私を知らないで…



しかも、高齢化社会の到来である。古い型の金持ちはいなくなった。の波である。

ウィーン・カジノも高齢化

最近、自分がギャンブルに醒めている事に気付いていた。マカオで2回張っただけであったし、ポルトガルのエストリアでも10回で、後はエスプレッソーを飲みながら生バンドを聞いていた。

一晚3万円勝ったら引き上げることができるようになったのだ。売れない娼婦に近くなった。熱い血は何処に行ったのか。

ここウィーンでも少し勝った所で、テーブルを離れ、壁近くのテーブルでコークの氷の音を聞きながら全体を見ていた。そして気付いた。「あっ、カジノの高齢化だ」と。

目の前を成人病と闘う老人たちが往来する。薄暗い隅で小額紙幣を真剣に数えているおばあさんがいる。決して賭けてはいけない金を別の財布に移す。

「ほら、あの大切な年金が胴元に吸い取られるんだぞ」とコークに話し掛け、振って氷に返事をさせる。やり切れない気持ちで年金の最後を見届けに彼女の後を付ける。

そして、驚くべきことを発見した。

世紀末ウィーンの現実はその通りに簡単ではなかった。ルーレットの最前列に座り込んだ高齢レディーは、500円のチップを3枚持っている。そして、ここぞという番号に賭ける。

そして、締め切り寸前に、さりげなく引揚げ。「やっぱり、あの番号に変えるわ! あら、もう賭けちゃ駄目なの」という。

これを延々と繰り返す。2時間後、「面白かったわ。また明日ね」と立ち上がり、チップを現金にする。

「あら、今日は引き分けだわ」と。

この高齢化に伴うカジノの衰退を調べるために、はるばる、ユーロシア大陸最西端ポルトガルのリスボン近郊のエストリル・カジノを訪れた。

そこはウィーンなど比較にならないほど高

齡化現場となっている。

ここでは、ディーラーたちが超を冠したくなるほど高齢である。

端正な顔、鋭い視線そしてメリハリの有るカード捌きのしなやかな身のこなしの若者や美女は姿を消している。数人の若い女性がチップを選り分けるなどの下働きをしているが、彼女たちも平均年齢を引き下げる効果がないほどである。数人の老ディーラーなら、よほどの名人かと思うが、全部が老人である。

若く華のあるプロはラスベガスかマカオか地下に行ってしまったに違いない。負けると分っている賭け事に若い客も来ない。どこかでテレビゲームをしているのであろう。まだ金額はそれなりに大きいけれど、老人対老人の場になってしまった。数年後の閉鎖も予感した。ラスベガスのマフィアは、本能的に気付いて街全体を遊園地に変貌させ始めている

それでも、ヨーロッパのカジノは男の仕事場世界である。蝶ネクタイの男たちがフォー・ザ・マネーと仕切る。女性がディーラーをするには、胸が大きすぎるかもしれない。客の前で上半身を上下させるたびに、スタッフを含めた皆の頭が混乱し、誰が何処に置いたか忘れてしまう。

以前より、オーストリアのルーレットにトラブルが尽きないであろうと(誰も聞いてはくれない)警告をして来た。ひとつは使用しているチップが一種類であることである。次に「ノー・モア・ベット」コールが遅すぎることである。球が落下する寸前までみんな賭け続けている。そして最後は客が自分で置かないでスタッフに頼み過ぎである。馴れた客は「2に100 シリング 2 6に100、5と6の間に1。0 1 2 3で100、2 1、2 3に50 ずつ、2 6に50…」と早口で指示するのである。注文の配達の間合わず、当選番号が決まった後にも、配っている時もしばしばである。プロのプロたる所以を見せようというのである。

一種の飲み屋状態である。当たらない場合なら

私でもできそうだが、いつもうまく行くとは限らない。

ある時、やや生活に問題がありそうな老人が、「あそこに張ったのはワシだ」と言い始めた。言われたプロの頭が混乱し、ジャッジの顔を見る。彼も右手を口に持っていき爪を噛んでちょっと肩を竦めた。さて困った。彼の言い立てを否定できる者が居ないのである。

老人は執拗に主張する。ゲームが止まる。ジャッジは手を口に当てたまま、声を殺して隣と相談する。良い解決策が無い。過分の金を与えられた客はどっかに行ってしまった。いまさら返せとも言えない。スタッフたちは、目立たないように別々に耳打ちを繰り返す。遂に老人にチップが払われた。何ごとも無かったようにまたルーレットが回る。しかし、少し後に、2人の男が現れる。ジャッジを交代させて、連れて行った。先刻の一部始終はモニター室で監視されていたのである。重複して支払いをすることは簡単に見逃される事ではないのだ。

残ったスタッフたちは連れて行かれるジャッジを、横目で追う。唇を動かさずに会話をしている。蝶ネクタイを引っ張って口を尖がらせて息を入れる。

この風景は稀ではない。その時は、強いドイツ語だったので、店が困惑したのであるが、一般的に中国人とかがクレームを付けても、少しだけ聞くが、ジャッジに伝えるだけである。ジャッジが唇と肩をすぼめて、却下する。

こうしたトラブルは次の事件を招く。返還間近なマカオでは、私は儲けてしまった。

事件はブラック・ジャックで、スカシの無いつまり偽札が見つかって、拒絶されたことから始まった。ディーラーは偽札を男に返すだけである。警察もガードマンも呼ばない。なぜなら、カジノ全体を警官よりもはるかに怖い組織が守っているからだ。男は驚きもせず、立ち去る。しかし、その後、彼は組織によって嚴重にマークされ続け組織に重要な人物でないことが確認されたら処罰されるであろう。

ラスベガスであれば、ミラージュ・ホテルの裏の砂の中に埋められるケースかもしれない。香港に限らず、多くの都会では、偽物がかなり認知されているのである。ババ抜きゲームである。誰かに渡してしまえば良いのである。

偽札、スリ、スパイ活動などありとあらゆる犯罪がうずまくマカオであるがカジノで偽札行使を見たのは初めてである。

マカオカジノの女性スタッフたちは無言で会話するなんてことはしない。仕事中から仲間と、ペチャペチャと言っている。

男の行方を視線で追いながら会話が止まらない。

その時、彼女の心に油断が生まれた。自分の数字が 20 という最高に近い数なのに、ドジにも 22 以上、つまりバーストしたと勘違いしてしまった。客の全部に勝ったのに、チップを払いはじめたのだ。貰った客は急いで離れる。

私もすぐに気付いたけれど、顎を撫でながらさりげなく貰う。

カードを片づける時、彼女の動きが止った。その時、間違いに気付いたのであろう。しかし、次の瞬間、何事も無かったように次に進んだ。他の女性スタッフたちも、途中で気付いたのであろうが、事を荒立てかなかった。プロだなーと思った。

しかし、客が得するこんなトラブルはやはり稀である。

完敗

「徹底的についていない」時はしばしばある。

「なんで、確率 50%なのに、あんなに連続して、反対側に張ったのか」と思うことも多い。

「意地になって、勝を待つ」ことは完敗につながる。ブラックジャックで醜悪なものは、品のない金持ちである。自分がついていない時に、一気に勝とうと、大きな金額を自分だけでなく他人の所にも置く人である。

どのカジノでも大金を張る人は大歓迎である。その金がどういう事情のものか問題でない。

「札を引くかステイするか」を決定する権利

は賭け金の一番多い者に有る。

7人が座っていて、ある者が残りの6人の全てに大金を置く。彼は「ステイまたはヒット」と言う。我々6人はただカードを開けているだけの役となる。

大体、そうした人は負けが込んでいる。

つまり、彼の判断が(欲にくらんで)裏目、裏目に出ている。だから、他の者の運を乗っ取ろうとしているのである。

我々も2回くらいは許すが、大体は席を立つ。そして、「負けろ、負けろ！」と店を応援する。

ヴェネチア

負けたまま、いつかは復讐を、と考えているカジノの中にヴェネチアがある。



イタリアは各都市が「盗難の多い町・ぼったくり都市・釣銭両替の誤魔化しの町」などトラブルの多い国と言われるが、ヴェネチアには珍しくカジノがある。金銭絡みのトラブルの多い町にあるカジノの性か、徹底的に負けてしまった。悪魔に魅入られたように一回も勝てなかった。

ブダペスト

ハンガリーのブダペストのカジノは中が、ジャングルのようにデザインされている。どういう意味があるのか意図がわからないが、樹の上には監視カメラが目立たないように設置されていることは確かである。

思い出せないほど完敗であった。

中国人が客の多くを占めていたが、中に 30 歳

くらいの女性が高い勝率を上げていた。無秩序に張っているように見えたが、詳しく観察すると、あるゾーンを決めて張っているのである。当然、ゾーンの反対側にも少し張っている。つまり、ルーレットの数字の配置を完全に暗記しているのだ。

整理された記憶と瞬時の判断力にただ感心してしまった。

勝って帰る

「張れば勝ち、張れば勝つ」を夢見ないギャンブラーは居ないであろう。

どのギャンブラーの過去は「家人には到底言えない敗残の連続」であろうが。長い間には、そうした経験も時々ある。

世紀末の混乱の中で遂に成し遂げた。1999年3月、マカオのバカラ。ギャンブラーたちが夢破れて一斉に立ち去ったテーブルに座る。インチキが有ろうとなかろうと、バカラは2分の1の確率である。その「2分の1」なぜにああまで連続で負けるのか不思議であった。2200香港ドルをチップに換えてプレイヤー側に1200を張る。1分後、2400となった。計画では、そのまま倍々ゲームする筈であったが、少し怯んで1700をプレイヤーに再び張る。2分後、3400が返って来た。計画ではそれをバンカー側に置くつもりであった。しかし、3分で2900が回り込んで来たのである。高級コールガールだって不可能な稼ぎだ。これで充分だ、これで十分だと、脳が囁く。フラフラと立ち上がってしまった。人垣の間から次の勝負の顛末を見守った。「今日は何という冴えた勘だ。バンカーだ3400張っていれば6800だった！」とつぶやいたが、後悔はなかった。

そうである。買ったときは決して後悔しない。賭場を急いで離れる。「遂に、全勝だ」と心で叫びながら。

一度位完勝で引揚げたいものなのだ。

ウィーンでのその時の戦いも苦戦から始まった。瞬く間に10万円が消えて失意のままホ

テルに引き上げた。旅人に「考えられる全て」が用意されているウィーンの夜、ずーと、テレビで「有料・雌雄格闘技」を観て過ごした。オペラにも行かず…

しかし、ウィーン最終日のカジノで、判断の7割が的中し笑いの止まらない旅となった。しかし、次の訪問地イスタンブールのカジノで惨敗し数万シリングを置いてくる事になると考えていた。

だから、生まれて初めての魔都イスタンブールのフロントで「ミスター残念ですが、イスタンブールにはカジノは有りません」とトルコ人に言われた時、その旅の勝ちが確定した。

シャモニ

マッターホルンのフランス側基地のシャモニは複数の仲間チーム行動をした。

妻と友人の細君と私が散らばって「ルーレットで「赤黒、大少、偶数奇数」でどちらか3回連続したテーブルを探す。そして、反対側に賭けるように指示をだした。その作戦が的中し、彼女たちは稼ぎを私に届けにくる。

原っぱで子犬に棒を遠くに放ると褒められるために啜ってくるように。

これが3回続いたときだった。白人と黒人の大男が私の前にふさがった。

彼らには私がヒモで彼女たちの上がりを集金しているように見えたのであろう。

よく考えれば、中年の女性が短時間に連続して稼ぐことができる職業があるはずがないとわかるはずだ。でもスリならあるか！

彼らは、私にパスポートを見せろ、と強く言う。いろいろやり取りがあつたけど、なにせ、ヒモなど仮説を立ててもその立件は困難なはずだ。そもそも、ヒモが逮捕されなければならない理由がない。立てた仮説の弱さに「パスポート提示要求」だけに終わってしまった。

カジノでは毅然とした態度があれば、次の段階へ進むことも、用心棒も怖くない。

ギャンブラー卒業か

ルーレットからバカラへ

しかし、2 級にもなると、4 つのゲームを知らなくてはならない。

異国特にオーストリア、イタリアそしてモナコでは、言葉を使った駆け引きは不可能であるから、入り易いのはルーレットであろう。

ルーレットでは 0 または 00 から 36 までの数字に単独で張るだけでなく、隣の数字と跨って賭けたり、クロスに賭けたりすれば 4 つの数字にも同時に賭けることもできる。そのほか、「奇数偶数・赤黒・大小」などもあるから何百種類にも賭け方がある。

ルーレットほど確率が低いものではなく単独数字であれば、37 分の 1 の確率である。

このように低い確率のルーレットであるから、(閃きによって)チップを高く積み上げた数字が来れば、36 倍になる。コーナを使った一点賭けでは 120 倍以上となる。

そうした「過去の大勝ちのイメージ」から解放されないある種の人々は、盤面一杯に 6-70 個のチップを張ることになる。両手に山のようにチップを盛って、3 分位の間にどンドン置いていく。

盤上の数字は殆ど隠れてしまう。

100 枚以上賭けるためにはチップの数と所はひらめきと偶然とである。時々チップが指から抜け落ちて行き場が決まることもある。

ゼロに賭けるのは性格による。山のように賭けていれば、よほどに運が悪くなければ何枚かは当たる。つまり、たくさん獲得し全部出撃することを繰り返しているわけである。

当然、外れれば、スッテンテンになることもある。しかも、映画「ステイグ」にも出て来るが、店による客騙し(映画では、大金 3 千ドルを黒に全部張った主人公が経営者の目のサインでボタンが押されて赤が出る、インチキ)も十分に考えられる。このためか、ルーレットに見切りを付ける人々も多い。



大きな金額のチップが獲得できると大抵それだけをポケットに仕舞い込む。これには、二つの訳があり、一つは勝ったという実感をポケットの中で味わうことができる。目の前に大金をむき出しにしていると、チップも取られるし、前方のクルーピーからは目の仇と狙われるし、背後の小悪党の商売欲を刺激させることを避けるためである。彼らだって、懐に大金があるからこそ狙うのであって、負けて、退場するヒトは除外される

わたしは 100 も賭ける異常者を軽蔑しているから、紳士らしく賭ける。

わたしは出来上がった形を大切にすることから、ある数字(大体 32 が多い)を中心に「斜めとか四角とか飛行機型、ナポレオン騎馬型、軍艦型」など型を作る。何回も繰り返していると、スタッフがあきれ顔で手伝ってくれる時もある。

この方式は当たれば大金が転がり込んでくる。4 回続けて外れたときは、肩をすくめ手を広げて場を離れる。店のスタッフは、唇だけ少し動かして「バカか?」と仲間と会話する。

しかし、当然愉快千番なこともあった。インスブルックのカジノはヒルトンにある。駐車場で正装してカジノに入って行く。一回りした後、入口近くのルーレットに坐る。飛行機型の何回目、ズバリ 32 がきた。220 枚のチップが渡された。しかし、張ったままにしておいたら、続けて 32 となった。またもや 220 枚が渡された。さすがにすべてを引き上げたので、450 枚のチップが手の中に残った。壁の椅子で少し余韻を楽しんだ後、両替所で現金にかえた。すると、5 ユーロのチップが残った。仕方なくさっきのルーレットに戻って 0 のところに置いた。そうしたら、0 が出てしまったのだ。

ここは、スペインのガリシア地方にある港町で、イギリスと対峙している。何故行ったか今では思いだせないが、多分、サンティアゴ・コンポステラへの旅としての基地としたのであろう。

町のレストランで〈ガリシア料理〉スープとしては「カルド・ガジェゴ」続いて「ぶつ切りのゆでタコ（オリーブオイルとパブリカで味付け）」カニ料理は「塩ゆでからカニ味噌をつかったもの」まで各種。デザートは タルタ・デ・サンティアゴで、満腹になったところで、少し離れているカジノに向かう。

広いカジノ場を次々と負けながら、彷徨っていた。最初のルーレットで 300 ユーロ負け、次のブラックジャックも 4 回続けて負けた。そろそろ私が勝つ番と考えていたところ、美人のディーラーにかわる。容姿 90 点の佳人である。張り切って、700と400を2カ所に賭ける。いい形で勝った。4 回負ければ 2 回は勝つと考えて、倍になった 1400と 800 を引き揚げず、そのままにする。

幸運にも親のカードは 6。当然、あと 2 枚引かなければならないから、2枚で 15 以下は確率が極めて低い。ドボンになって私の勝ちと確信した。その通りに、終わる。

負けを取り戻し300勝ったので、チップを上げて席を立つ。隣のおじさん紳士が、ピンときて、二回目には私に乗ってきて、40 勝った。

彼に「まあ、こんなものでしょうね。いい引き際でしょうが」と。彼の後ろに立って彼の次からは単独行動を見守った。

美人にいい手が来始めて紳士は止め時を失って負け続ける。

君が離れたから店にツキが行った、とわたしを見て、唇をしぼめる。

「貴方に勝たせるために私はいるわけじゃないんだ。」と無言で返事。

我ながら見事な引き際であった。離れる時、多めのチップを美人に渡す。カンカンとテーブルの角で叩いて、チップ入れにおとす。彼女の脳裏に「うならされた日本人」が残るであろう。

快晴 夜十時前 太陽が大西洋に落ちた。

群青色の夜空が広がる。港には無数の豪華ヨットが係留されている。

ヒトは落下していくときに「走馬灯のように記憶が脳裏に展開する」とこと経験するというが、異国で初体験が目の前に展開していると「旅とは普段忘れていた無意識の世界へ踏み込んでいく」とことかと思う。

バルセロナでの大逆転劇

バルセロナはウンチみみたいなモニュメントがある 44 階建のアーツホテルにカジノがある。

静かな部屋での一休みの後、夕闇が迫るバルセロナカジノに乗り込んだギャンブラーは、世にも稀な経験をする事となった。

しかし、今回のカジノ体験を正確に述べても、きっと本当のこととは信じてくれないであろう。2分間で、2830 ユーロが転がり込んできた話であるからだ。

多くのカジノ同様、1階はスロットマシンの部屋である。そこは、一見して観光客とわかるアマチアたちが1、2ユーロ硬貨を一生懸命に放り込んでいる。そして、時々幸運にも硬貨が音を立てて戻ってくるのだが、彼らはそれらを再びマシーンに返す。これを繰り返している。これをすり抜け2階に行く。どのカジノも似たりよったりである。

ヨーロッパのカジノがアジアやラスベガスと違っていたのは、服装の規制であった。気品風格などは言い出せばキリがないので、ネクタイを締めているか、スーツはどうかとか、靴は革であるかなどを門番は判断の方法としていた。チップでも握らされようものなら、評価は3ランク上がる。

(ギャンブラー風に言えば)私が入りをくり返すカジノの中で一番、格式高いと感じさせたのはウィーンのカジノであった。スニーカーでは駄目、ネクタイも上着も必要だった。しかし、バルセロナは、最近どこもそうであるが、パスポートと金さえあれば良い。

カジノの両替しようとして日本円を出したら、駄目だという。あの偽札事件は、ヨーロッパのカ

ジノでの日本円の換金拒絶を引き起こしたのだ。「そんな、ことをする人間に見えるか！」と言うと「見える」とつれなく答える。

だから、円しか持っていなかった日本人は、金儲けというビジネスチャンスを失って、失意のまま帰らざるを得ないのだ。(損失を免れたと思うべきであるのに) 幸か不幸か私はユーロを持っていた。

そんなこともあり、バルセロナのカジノには日本人は多くなかった。2時間の格闘技のあと、かなりの負けでよろよろしながら出口に向かう。

パチンコなどでも、首を掻いたり時計を見たりしながら出てくる者は大抵敗者である。きょろきょろしながら、あるルーレットのテーブルのそばを通りかかる。

その卓はあまり、人が群がっていない。しかし、ひとりの若者が、1回の勝負に7万円くらい賭け続けている。

眼光鋭く唇は薄く、骨ばった頬、掻きむしられ続けられているためのボサボサ頭そして痩身の若者。これが、多くの出資者をバックに背負ったギャンブラーの典型である。

マカオでは、彼らの仕事場はバカラである。観光客を入れない3階以上の特別室で、プロ対プロ、プロ対店として行われる。1回に数百万が賭けられている。当然マネーロンダリングである。闇で稼いだ金がゼロになるかキレイにしても増えるかの組織としては最後の場面であるから、テーブルはプロに付き添う助手や会計係、運び屋などで取り囲まれ、全体は殺気さえ漂っている。

さすが、ヨーロッパでは露骨なマネーロンダリングと思われる光景を目にすることは無く、個人的なプロに時々出会うだけである。

バルセロナで痩せて小柄で顔色が悪い20代後半の典型的なギャンブラーに会った。毎回、山のように賭け、当たると大きな500ユーロチップを胸のポケットにしまい込む。外れるとゼロになるから、ポケットから取り出して、チッ

プに変える。勝つとまたポケットにしまう。何回か、はずれが続いて、店の紳士たちも、肩をすくめたり、手を広げたり、唇を占めたりして、同情している振りをする。

そのとき、ハッと気付いた。この卓は4回「偶数で赤」という組み合わせが連続しているのである。5回目には「奇数で黒という」組み合わせがあるべきだ。なんという幸運な卓にであったのだ! 「どうぞ、お取り下さい」と言っているも同じだ。1年前のウィーンでは「このやり方」で全勝したのである。しかも友人夫婦の目の前で!

「ありがとう」と言って200ユーロずつ、「奇数、黒」に置く。あれ、「偶数で赤」が出た。今度こそと「奇数と黒」にそれぞれ200ユーロ置く。エー! また「偶数で赤」だ。

実はあるのだ。20回くらい同じ組み合わせが出るのは…なにせ、その度、確率は2分の1だから。

大変がっかりして、今度は何も言葉に出さず、200ずつ置く。さすがに黒が出た。でも800の損失で嬉しくもない。返ってきた300を32の飛行機型にする。大体そうした時は、ことごとく外れるものだ。30しか残っていない。「この卓は駄目だ」と隣の卓に行く。賭けようとする「チップはテーブル毎だから、そのチップは隣で賭けろ」と指示される。

拒絶されて、肩を竦めて、元の卓に戻る。卓をみる。奇数のコーナーにチップが山のように積まれている。「私の後、儲かっている人がいるのだ。」と最後の30ユーロを握りしめる。

と、その時である。隣にいた白髪の老人が、首を振って、うず高く積まれて放置されていたチップを指刺して、何か私に言ったのだ!

生涯でこの時こそ、外国語を理解できたことはない。カタルーニャ語が完全に理解できた! 多分私は少し飛び上がったと思う。「えっ、これ、ぼくの??えっ、」と右横のヒトに同意を求める。しかし、カジノのルールは「決して他人の意見に同調も否定もしない」ことである。

彼は唇を少し動かすだけだ。でも、それで十分である。「そうだ！あの紫色チップは僕のだ！」店のヒトをそおーっと見ながら、両手で、チップの山を少しだけ、手前に引いてみた。だれも文句を言わない！「やった！僕のでいいんだ」震える手ですので、チップは崩れる。周りの人たちは（2割の）祝福の気持でこの喜劇を見守る。店も「ばれたらしょうがないか。それにしても、あの年寄り余計なことをしやがって…」と表面は冷静を装う。「それに、あの東洋人はついていそうだから、そのまま置いておいて、もう一度奇数がでたら、また一山取られてしまう…しょうがないか」と皆諦める。しかし、一人だけがっかりしていたものがいた。クルーピエである。さっきからゼロを狙っていたのである。「ばか、早くゼロを出せ！」と店に（目配せで）命令されていたのに、また外したのだ。

こうした時、店の人たちは、目と指と肩でほとんどのことを会話する。たまに、自分たちの言語を低く早口で言うこともある。旅では、多くのドジをしているから、こうした陰口やからかいが目の隅に入ってくることもある。しかし、まったく無視してよい。他人の会話は必要な部分だけ貰えばよいのだから。

「やった」と震える顔はきつとくしゃくしゃになっていただろう。しかも「30をゼロに」とかすれた声で叫んだのだ。

ゼロに置かれた直後、「ノーモアベット」とディーラーがテーブルで手をひろげる。その直後に玉はゼロに吸い込まれた。彼はゼロを出さなければならぬところで、奇数を出し、出していけないところでゼロを出した。もともと、私がゼロに指示したのは回り始めた後だったから、もう止めることは出来なかった。

数分間の間で起こったことをまとめると「隣のヒトが教えてくれて、1800を引き上げた。手の中の30をゼロに頼んだ。なんとゼロが出たのだ。1000が苦虫を噛み潰したような係員が「グッドラック」と心にもない言葉で私の

手元に積まれた。

つまり、この数分間の出来事が、一つでも少しでもずれていたら、私には「ゼロに賭けなかった30」しか残らなかったのだ。そして、奇数に積まれたチップの山は、「ばか、欲掻き」と唇で言われながらゆっくりと回収されて、穴の中に落とされていったのだ。

絶妙なタイミングでゼロに賭けた。何故なら、プロである彼らはゼロを出すことを訓練されている。円盤の回転数・玉を離す場所・ひねりの強さ・押し出しの強さを組み合わせれば、かなりの確率で「狙った数字」を出すことが出来る。

賭けた者が離れている間に奇数コーナーの山盛りとなったチップを取り上げるには、ゼロを出せばよいのである。しかも0の左は32で右隣は26だから、3個連続のこのコーナーに入れるだけで良いわけである。かなり易しい仕事である。

回転し始めた瞬間に奇数のチップを引き上げ、かつ次の瞬間、30をゼロに賭けた「ボケから醒めた日本人」に「ズルイ！」と叫べない店！

乞食から小金持ちに変身した日本人が渡した多額のチップに「サンキュウ」と言うとき、複雑な雰囲気はその場に漂った。

「フィニッシュ・チェンジカラー」と言いながら、チップの山を押し出す時の快感があるからこそ、ギャンブラーは消え去らないのであろう。

平地から平地、平地から小高いところへ。小高いところから地面に、地獄から天国へ。天国から地獄へ。そして、天国へという生涯2度とないであろうハッピーエンドの喜劇であった。

しかし、勝ったという誤解されそうであるが、負けがチャラになったのだ。

両替前のチップを抱えて、トイレに行く。眼の険しそうな若者が、後からついてくる。かなり悪い予感がした。いやだなあ、と思いながら、トイレに入ると彼は左に入った。良かった、と安堵して手を洗っていたら、店の女性が飛んできて、此処はレディー室だと言われた。

かなり、興奮して判断力が低下していたのだ。

ことになる。

深夜11時、カジノの一角のレストランで、プロシュートハムとアスパラガスを前にして、眼前に展開されている、賭け事を悠然と眺めていた。



夜10時50分に、あの場に居合わせなかったならば、あの喜劇は起こらなかったと考えると、エイプリルフールのその日の朝、スペイン最北東のカダケスを8時過ぎに出発したときから、必然・偶然のシーンが積み重なって、その時間と場所に遭遇したのである。

それが運命というのであろう。

「忘れていた」と言っている、「誰も信じないだろうな」とにたりと笑う。

その時、ハッと思った。あの白髪の老人はひょっとしたら、天の人かもしれないと。天上の方が「いいかい、カジノなんかもう、きっぱりとやめなさい。一度だけ奇跡をあげるからね。分ったら、ハイでしょ」と言ったとも取れるし、「お前はね、運のいい子なんだ。ストレスがとれるなら、してもいいよ。今回転がり込んできたお金は軍資金だよ」と言ったのか？

その確率はやはり2分の1だ。

人生とはこうしたもので、喜劇と悲劇は表裏一体で、どちらがでてもおかしくないのである。人として限られた時間を過ごすためには、あらゆる幸せを謳歌しなくてはならない。

特に、医者・看護婦を初めとする医療スタッフは辛くてもこうした教養(?)なるものを身につけ確率二分の一に近い仕事に対処できなければならない。

少しの金を張るグループはブラックジャックに行き、大きなバクチをするグループはバカラに向かう